

句集

月下美人

岩原

うつぎ

每日句会入選句

日射し燦此処にいるよと龍の玉

初句会抱負も添えて一句評

地の野菜めあてに里の初市へ

大とんど月を焦がさむばかりかな

着膨れてシートベルトのままならず

一羽きて梢ぼるる寒雀

火の玉となり寒林へ夕日落つ

リリーフは屈強の婿餅を搗く

ふうふうと湯気踊らせて七日粥

朝刊のポストはみ出す霜の花

四日はやグラランドゴルフ音響く
ありたけの鍋勢揃ひ年用意
六十代最後の年や日記買ふ
外は雪といひつ訪問ナース来る
ポケットに溜まる小銭や年の市

日記果つ何時も誰かに助けられ

冬の鯉石を枕に身じろがず

吟行の余韻に浸る柚子湯かな

吟行子師走の街を左見右見

ポインセチア並びしナース詰所かな

徐にマフラーを解き切り出しぬ
駈けてくる子やマフラーを翻し

年木積む神の山より切り出して

根深汁外はびゅうびゅうと風の鳴く

夕時雨枯山水を潤しぬ

稻荷社の旗はためきて時雨急
神木の椽の実一つ御守りに
雨樋の行方を探す颱風禍
きこの展一目で毒と分かる紅
新調の包丁の切れ葱刻む

新米炊く地の名水に拘りて
新米を支へて運ぶ布袋腹
香り立つ朝の珈琲小鳥来る
雨の稲架脚踏んまへて撓みけり
次々と棚田呑み込み霧走る

岨徑の足元綴る曼珠沙華

谷戸百戸木犀の香に包まるる

キヤタピラの轍にあらず猪の道

きちきちを先立たせをる試歩の杖

分校の児は幾人ぞカンナ燃ゆ

合唱のごと朝顔の咲き揃ふ
と見る間に夏霧包む天上寺
爽やかに句碑を巡拝天上寺
クレーンニ基入道雲へ直立す
夕焼に一人降りたつ島のバス

遠雷や小さき臍ある力石
夕端居今日の介護を恙無く
盆踊り当地音頭に輪の膨る
欄干に神戸の市章登山口
不揃ひの椅子卓並べ滝見茶屋

谷底を白蛇這ふごとと岩清水
独り酌み仕上げは茶漬け秋深し
触れまじと思ひつ触るる萩小径
稲架掛くる嫁姑とは見えぬ仲
鐘楼へ庫裏へと法の道をしへ

爽やかや神鈴の音頭に受けて

つば広を目深にかぶる案山子かな

一斗缶吊るすは谷戸の鳥脅

近寄れば大女なる案山子かな

言ひ足りぬらし夕庭の法師蟬

秋晴れて掃除ロボット機嫌よし

蝸や奈落へつづら折る山路

茅葺の屋根匂ひ立つ夕立かな

湯ほてりを冷ますベンチや天の川

梅花藻の流れに浸す大やかん

月下美人帰宅の夫に開きけり
朝蟬の鳴き出す迄の庭仕事
空瓶に名水満たす音涼し
鼻眼鏡ずり落ちさうや玉の汗
平安な暮らしを謝して梅を干す

汗引きぬ氷室めきたる玄室に
青葦の葎を縫ひて川蛇行
花栗の香にむせる能勢電車
せせらぎの高鳴るあたり虫群る
ビール干し介護疲れを癒やしけり

青時雨森のごとくに大櫓

吊り橋に立ち往生や青嵐

万緑や腰掛け石に似し礎石

小気味よく胡瓜を刻むリズムかな

集ひたる道真鼻肩夏期講座

丸き背を鏡に正し更衣
時鳥雨が来るぞと叫びけり
警官の表敬並び更衣
筍の土乾きをる亭午かな
花の下介護福祉車駐車せる

風船を付けて浮きさうべビーカー

遠足のしんがりにつく神の鹿

口誦さむいつもの唱歌青き踏む

春愁や閻王と眼のあひてより

呆け防止とて大股に青き踏む

猪罌の檻に遊べる雀どち
闊歩せる鶏たちに下萌ゆる
炭焼の煙に日矢の斜めかな
山伏の法螺に始まる節分会
戦中の苦労話や女正月

花道に舞ふ衣擦れの淑気かな
連獅子の足ふみ揃ふ初芝居
初鏡介護の日々に負けまじく
門先を掃いて了とす年用意
ひとつまた一つメモ消し年用意

墨磨りつ一句の思案賀状書く
舌頭にほ句千転す柚子湯かな
人波の中に見慣れし冬帽子
新聞に親芋子芋おすそわけ
古曆苦難の日々も語り草

竹の影現れては失せる障子かな
飛行雲釣瓶落しの日を登る

投函の文懐に十三夜

鳥渡る火の見櫓の遺る村

木に凭れ憩ふがごとき捨案山子

電柵に触れてはならじ栗拾ふ
堰にさしかかりし澗の水澄める
神鏡も斯くやと仰ぐ今日の月
曼珠沙華棚田の畦の条理かな
田仕舞の煙を潜り福祉バス

三人のどれが爺やら案山子やら

黄金田にしるき夕日の山の影

上弦の月ひつかかる秋簾

稻穂越し産土神を遥拝す

蝉とりの尿飛ばされて捕り逃す

今朝秋の葉末に昨夜の雨雫
炎天へ人を吐き出す回転ドア
向日葵の直立したる駐在所
対峙せる二匹の守宮月の壁
遅刻するわけにはいかず炎天下

小康の夫を連れ出し蛍狩

猫うららヨガのポーズに毛づくろひ

春陰に点りし赤は交番所

存問の蝶パンダ舎へ麒麟舎へ

高欄の足下を埋む花の雲

飼育士に猿が耳打ち園うらら
羽根広ぐ孔雀に春愁払ひけり
村人ら総出で子らの卒業歌
うららかや荒神坂に昔菓子
掌でなでてはもの芽励ましぬ

雛巡る舟板塀の古町に
雛明り洩る豪商の蔵屋敷
破れ築地傾ぎしままや竹の秋
地蔵在す千年櫓洞温し
萌え初めし蓬匂ふと手から手へ

一雨に噴いて春子の子沢山

我が吐息手向けん苞の寒牡丹

山畑の菜の立ち上る雪間かな

春の日に弾みやまずよ雀どち

はんぺんの膨れつ面やおでん鍋

国生みの島への架橋風花す

新調の靴真つ白や青き踏む

園丁の鋤音すれど梅固し

糸寒天白波のごと乾きけり

里山をけぶらすべしや大とんど

羊羹を分厚く切つて女正月
青竹の笥を縷々と寒の水
朝市の客が囲める焚火かな
朝一の焚火を囲む道の駅
同郷と久闊を叙すおでん酒

凧や固まつてゐるドアボーイ

水仙の一番咲きを仏前に

喋りたくなき人と会ふマスクかな

ぶり大根あらと謂へども氷見の鰯

返り花指差す車椅子の人

剥製の猪が出迎え狩りの宿

ダム湖とり囲み全山紅葉す

アイライン引き立たせめるマスクかな

縁側で新聞開く小六月

交番所空つぽなりし小六月

古民家の茶房の卓に虚栗
添へ棒をされて自然薯届きけり
城址の碑に凭れ見る村芝居
万灯会源氏祖廟の鎮もれり
天の底抜けしごと雨台風裡

かなかなの声に昏れ初む神の杜

干蛸の乾く匂ひや漁師町

極彩のパプリカ食べて暑に耐ふる

物忘れ笑ひ飛ばして暑気払

シートベルト要る助手席の大西瓜

下校子の脱兎と駈くる夕立中
齒朶涼し御手洗の水降り懸かり
点々と居るは白鷺大青田
吉と出し水占や宮涼し
夏越とて真名井の水を家苞に

水鏡して螢火の纏れけり

空谷の奈落へ落つる螢あり

螢の夜昔がたりに更けにけり

本に飽きパソコンに倦む梅雨籠

どこまでも栗の花咲くローカル線

梅雨晴間唸りを上げる草刈り機

白雲の過ぎりゆく空花棟

毛虫見てよりむず痒き後ろ頸

引戸また機嫌斜めや梅雨に入る

緑蔭に半跏趺坐なる石仏

青梅雨のきらめき落つる鎖樋

ゴーヤはや張りしネットに蔓のばす

棚田風匂ふ八十八夜かな

見学の介護施設は薔薇の園

襦袢干す竿に小さな鯉のぼり

百選の棚田に生まれ蛙の子
巢燕を見上げて潜る仁王門
花ふぶき又花ふぶき九十九折
風が掃く舗道の落花畳かな
遠目なる著き桜は大伽藍

朗報のごとくに庭の初音聞く
春蘭を目当てに山路遠回り
木造の校舎を嵌めて山笑ふ
久闊を叙してももの芽に対しけり
整理札貰ひいかなご買ふ列に

いかなご船待つ大釜を滾らせて

洞深き老幹なれど梅真白

土撫でてもの芽まだかと存問す

老犬の歩を励ましつ青き踏む

弾丸見せて自慢話や牡丹鍋

眼鏡の度あはぬ言ひ訳歌がるた

飛行雲ぐんぐん伸びる初御空

六日早やハローワークに人溢れ

碧落に鳶を放ちて初御空

新築の窓に灯ともる聖樹かな

惜しげなく庭の幸なる柚子湯かな

マフラーを覆面巻きにバイクの娘

朝市のテント謝恩の芋煮鍋

ラジコンのヘリの飛び交ふ枯野かな

コンビナートとは言いがたき大枯野

年忘れ上座下座のなき集ひ
これよりは神域の山猪の罾
人力車庭に待機す紅葉宿
黄落の無尽蔵なるご神木
山荘の片屋根覆ふ散紅葉

をみな等を一瞥したる穴惑

七曲り抜けて展けし蕎麦の花

蕎麦の花虻の頭突きに揺れやまず

襖絵の龍と目の会ふ愁思かな

もう括る他なし萩の乱れやう

あそんでと吾をとりまく赤とんぼ

古い二人芋名月に肩ならべ

吠え立てる犬を一瞥穴まどひ

出囃子の杜に響くは村芝居

故郷の島の高きに登りけり

早稲晩稲パッチワークとなる棚田
ホームまで葛押し寄せる山の駅
八朔祭祝ひ南京玉すだれ
生徒らの農園葡萄朝市に
蟻の列渋滞すれど秩序あり

蠅叩き空打ちをして満を持す

捕虫網と箒と並ぶなんでも屋

秋の蚊に好かれて一人酔ひにけり

勤行の間に開きゐし蓮の花

里山に鉦舂して盆踊

白桃のどこから刃物いれやうか
手花火を買ふて帰省の孫を待つ

露天湯の四囲山襖星月夜

身じろがぬ沖のタンカー雲の峰

汗滂沱男言葉となつてゐし

花道の衣擦れ涼し仁左衛門

検問や手招きされし片かげり

マイカーの背凭れを倒し緑蔭に

三尺寝携帯電話鳴つてをり

一輛は風鈴の鳴る能勢電車

草いきれ獣道めく郷の道

寄る辺とす神の櫛の樹下涼し

徐行して進む電車や峪若葉

谷戸ここに明智の寺や著莪晷

吊り橋の足下を見よや朴の花

写経の手摺きて眺むる庭若葉

葉桜や吹奏楽の風に乗り

真つ白に乾くシートツや柿若葉

石仏の里の軒々燕来る

門川の涼し比叡の水なれば

大津絵の鬼が出迎え春灯
省エネの自転車通勤山笑ふ
ビル風に落花逆巻く交差点
空谷の桜隠れに一山家
谷戸の駅沈む万朶の花の中

瑠璃色の池を巡りて青き踏む

カーナビは旧道が好き山笑ふ

里の山トンネル抜けるたび笑ふ

吾が庭に来て存問の初音かな

落味噌の出来は上々一人酌む

まんまるに滲む夕日や黄砂降る

豆雛 マツチの箱を高御座

おほどかに袖ひろげたる古代雛

蹲踞の柄杓が躍る春の水

しやがみ見る節分草の目覚めしと

崖の上に立つ古祠や磴寒し
立春の雨に涙す道路鏡
車座に無縁仏や洞ぬくし
糸寒天己が身透かせ乾きけり
里山の日打ち展べて寒天干す

白波のごと日に反るは寒天田
日を弾く寒天干しの田一枚
からふじて崖に留まる朴落葉
行者道指呼の木隠れ猪の罾
脳天に音突き刺さる寒の滝

寄り道のおみくじは吉冬温し
舞ふ文字に園児喝采吉書揚
霜晴れの秀枝眩しき禽の声
夜明より炭の窯出し家総出
初夢の中でも何か探しもの

餅を搗く杵音高き杣家かな
臥す吾に影の移らふ白障子
降りる鴨翔つ鴨朝の湖広し
蒼天へ紅葉を鎧ふ甲山
ご開扉の吉祥天に小春の日

礎石あるのみの門跡木の実降る
首塚のご紋は桔梗落葉舞ふ
真つ先に蒟蒻に箸おでん鍋
故郷の時雨に遭ふも懐かしく
庭紅葉靴脱ぎ石に僧の下駄

息詰めて見る木の实独楽止まるまで
束の間の日溜り惜しむ返り花
切り盛りは媪二人や走り蕎麦
目鼻入れられて団栗笑ひだす
夕焼に弧の水脈描き入港す

長々と白き築地や十三夜
耕運機高鳴る谷戸は霧の海
菓子盆に心遣ひの柿紅葉
氏神へ通ふこの道野菊咲く
奏者なき自動ピアノのうそ寒し

数減りし鈴虫庭へ放ちけり

長寿眉揃ふ宮役秋祭

野良着翁今日は礼服秋祭

村祭り祝詞を囃す鴉どち

爽やかや湯立ての巫女の赤襷

いづくより木犀の香や夜散歩

山彦や祭太鼓を撥ね返す

畦に吸ふ煙草一服蓼の花

貌傾げ吾をいぶかる蝟螂かな

百歳の手押し車に供花の菊

海 凧 ぎ て 一 枚 鏡 翳 雲

一 湾 を 縁 取 る 街 の 秋 燈

唐 辛 子 照 り 夕 映 え の 平 家 村

下 校 児 の 運 動 場 と な る 刈 田

陣 屋 跡 な る 校 門 の 蔦 紅 葉

岩襖響かせて落つ行者滝

出格子に少し傾き秋簾

くくと泣く素浄瑠璃や虫時雨

真つ直ぐな道どこまでも翳雲

萩こぼる風化にやせし石仏

愚痴ならず声にして読む秋灯下

話し居る二人と見しは案山子かな

餅撒くは浄瑠璃人形八朔会

領けられし鈴虫どちら鳴き初む

蜘蛛の罫に透けて遙けし甲山

一人居の心おきなき虫の闇

秋暑し数珠なすタクシー黒ばかり

法師蟬途切れがちなる亭午かな

白壁のタトウーとなりし守宮かな

渡船場の西日に透ける蛸簾

星月夜里山息をひそめをり
恐竜のごと湾に立つ雲の峰
朝顔の今日は何色朝戸繰る
国生みの島より立ちし雲の峰
夕風をまたぎて点る本四橋

斑の一尾金魚掬ひの標的に
一溪の風にそよぎぬ合歡の花
暈の間なるが馳走や大昼寝
故郷の川の匂ひの鮎届く
吊り橋の涼し奈落に荒瀬見ゆ

目高の子追ひかけてゐる虫眼鏡

青葉木菟育む神の櫂かな

鮎の膳猪名の早瀬をまのあたり

怨念のごと毛虫焼く女かな

虹告げにまた病室に駆け戻る

梅雨しとど悲鳴上げをる破れ樋
バス停の標識を越ゆ立葵
田植女の御田に一礼して上がる
龍神の祠へ消えし螢かな
麓まで包む山気やほととぎす

お辞儀する駅のポスター―走り梅雨

岩走る山の引き水柿若葉

古民家の茶房を抜けて夏の蝶

獣害の電柵越しに夏薊

夕薄暑磯の香匂ふ無人駅

退院の夫に新茶の封を切る
香水の一人加はり昇降機
浜薄暑入り日を返す倉庫群
花棟ま青き空を烟らせて
寺守の箒に掛かる落とし文

瀧落ちて夜半の句碑にしぶきけり

桐の咲くダム湖に古りし望郷碑

畦川の奔る水音夏に入る

舌頭に千転しつつ青き踏む

草を引く五指を熊手のごと使ひ

幹に花噴かす力や老桜

垣越えて隣より来るしやぼん玉

武者窓に伊吹雪嶺迫り来る

春愁や櫓に深き手斧痕

春泥勇みて駈けるブーツの児

万葉の歌碑は恋歌馬酔木咲く
春の鴨煌めく湖のさざ波に
霧りて潤む日差しや追悼会
雨はれて杉の雫や春子噴く
田ほとりに農婦が捏ねし泥雛

梅林を離れても風匂ひけり
飾られて団地めきたる御殿雛
リリアンのシェードに透けし春灯
春泥の羊に逃げる牧の子等
下萌えの林道深き轍あり

雛の部屋柱に古き掛時計
盛り上がる句談議に笑む雛かな
白き腹雪に紛れし石叩き
空き部屋の一面鏡にある余寒
雪晴れや二間四方の堂に千木

野の春を見つける課外授業かな
檻褸纏ふごと白菜の霜枯れて
酒蔵の暗きに笑まふ享保雛
へつついに薪も積まるる雛調度
鯰跳ねて立春の日を散らしけり

寧かれと風花の舞ふ十字墓
休み田に獣道あり下萌ゆる
ある筈の肝溶けてゐる鮫鰯鍋
二の鳥居三の鳥居と道凍つる
水晶の欠片散らして樹氷落つ

風呂吹や母手作りの田舎味噌
割り落す黄身逞しき寒卵
寄せ鍋をつつく里山俳句会
スーパーの弁当で祝ぐ女正月
窯火守り昔語りや炭焼女

奴 凧 子 ら の 声 援 得 て 元 気

わ が 吐 息 触 れ む 咫 尺 に 寒 牡 丹

笑 ひ 皺 一 つ 増 へ た り 初 鏡

潮 騒 を 枕 故 郷 の 寝 正 月

気 に 入 り の ペ ン に 拘 り 初 日 記

単身の隣も呼びびて晦日蕎麦

胃薬を買ひ置くことも年用意

一日一句達成したる日記果つ

天国の彼にも賀状書かまほし

医者通ひ数へ日なるも休まれず

山の灯の星と瞬く聖夜かな
クレーンの天辺聖夜星めきぬ
路地隔て托鉢僧と社会鍋
冬ざれの島の西浦波しぶく
螺旋灯忙し師走の理髪店

年用意捨つることより始めけり
しぐるるや岩に現れたる多尊仏
小流れの音絶え絶えし冬菜畑
貸農園条理ただしき冬菜かな
光る海見えゐて猪名のしぐれけり

ヘリコプター師走の空を旋回す

お洒落など遠き日のこと着膨れて

湯豆腐の伊賀の土鍋に馴染みたる

冬の蝶風に吹かれて消えにけり

陽に反りて寒天重さ無くしけり

縞なすは丘のなぞへの冬菜畑
百羅漢の泣くも笑ふも紅葉影
笹鳴の空耳なれやもう鳴かず
酒蔵の高き小窓に冬日洩る
うつむくと仰向くとあり朴落葉

のぞきみし吾を手招きす菊主
舞殿の足跡は猿神の留守
大輪の菊籬とす野点席
黒潮の海を遥かに蜜柑摘む
曼荼羅に打ち敷く雑木紅葉かな

パソコンがわたしのレシぴ文化の日

心字池 秋日影濃き要石

秋風に金明竹のさやぎかな

日向ぼこ玉座にお尻はばからず

縁側に向けミシン踏む石落日和

里の秋笑ひ仏とて親しまれ
新米や列なすコイン精米所
秋天下像の竜馬に対しけり
虫の闇次のバスまで半時間
節電の病院ロビ―うそ寒し

野仏のお目元に映ゆ曼珠沙華

畦に腰おろし棚田の秋惜しむ

木道に靴音高し野路の秋

この辺と見し丁目石葛がくれ

ひよつとこの面またよろしくわりんの実

鱗雲傷には非ず飛行雲

力石否冬瓜の売れ残る

稔田の海へなだるる平家村

乱帙に紛れ出でたる秋団扇

一本の杭秋水を二夕分けす

秋没日沖の漁火点々と

羽衣のごと雲纏ふ今日の月

残照の湖に帰燕の影法師

秋燕ダム湖に夕日撒き散らし

鳴きとおす鈴虫の音に寝ねやらず

後手をつきて星観る端居かな
かなぶんのノックしてをる厨窓
風鈴を吊るして峡の一輛車
一山の四方にこだます法師蟬
故郷の山河を照らす盆の月

正座せるままにまどろむ生身魂

畑の物小振りを選び盆用意

指揮棒を振りたし万の向日葵に

グラウンドへ一礼涼し球児去る

裏山の竹のさやぎや夜の秋

一句集一氣に読みし秋灯下

古町の献灯戸々に宵祭

浦を行くバスがらんどう大西日

すれ違ひシャボンの匂ふ夜の秋

露天湯のランプに乱舞火取虫

簾吊る半畳ほどの無人市
断末の一声蟬の落ちにけり
立ち話尽きず片蔭細りゆく
空蟬に残る命の湿りかな
手荷物の腕に食ひ込む暑さかな

七夕紙金を選びて病の子

磐座を崩さむばかりはたた神

廃校の四方は杉山夏霞

木苺の見えて届かぬ岨の道

家族分釣れてよしとす鮎の膳

相呼応して鳴く墓や藪の奥
師の影を踏みて潜りし茅の輪かな
住み古りて玻璃戸の守宮親しかり
更けてなほ月下美人といふ貴賓
大き岩雄滝女滝と分かちけり

筍の底抜け落ちし紙袋
空を切る標高千の夏燕
丹波路の風に泡立つ栗の花
花栗の匂ふローカル線の駅
小恙の癒えて安堵の更衣

畳なはる山段染めに五月雨るる